

巻頭言 「SPACe開所10周年に寄せて」	
総合学習支援センター長 関田一彦……	1
[WLC] WLCの取り組み……	2-3
[GCP] GCPの取り組み……	4
[SPACe] 2023年度春学期についてのご報告……	5
[CETL] CETLの取り組み……	6-7
データサイエンス教育推進センター……	8
新任教職員紹介……	8

SPACe開所10周年に寄せて



総合学習支援センター長 関田一彦

S PACeはStudent Performance Acceleration Centerの略称、そのまま日本語にすれば学業増進あるいは学修加速のためのセンターという意味合いになるのか、本学最大のラーニング commons である。一方、あまり知られていないが、日本語名称を総合学習支援センターという。SPACeという施設を管理し、学習支援サービスを提供する、学士課程教育機構付置の学内部局である。

開 所前、SPACeはこの部局の名称として考えた。ただ、施設自体の呼称としても用いられることとなり、学生たちにはスペースという“場所”の意味合いで認知されている。せめてセンターの名称とcommonsの名称、二通りの略称であることを示そうと総合学習支援センターにはCenterを、commonsとしてのSPACeの場合にはCentralを使ったらどうかと提案してみたが、採用されなかった。本稿では開所の背景など、こうした昔話を少し書き残しておく。

2 013年9月、中央教育棟の使用開始に合わせて西棟2階にオープンしたSPACeは、大きく三つの学内ニーズに応えるものであったと私は記憶している。一つ目はワールドドラングージセンター（WLC）のニーズである。WLCはラーニング棟2階にあった視聴覚ライブラリーが、チットチャットクラブ（Chit Chat Club）など英会話の実習訓練プログラムを併せ持つ外国語教育センターに発展したもののだが、1999年に竣工した本部棟で独仏伊露など7カ国以上の言語で会話を楽しめるグローバルビレッジ（GV）を開設・運営していた。WLCは、このGVとChitChatClubを一か所に集め、総合的に語学育成を図るサービスを展開したいと考えていた。

二つ目は学生側のニーズである。中央教育棟ができるまで、長い間、文系A棟に隣接した福利厚生棟、特にF1食堂と呼ばれたエリアは、学生の自習スペースとして活用されてきた。文系A棟から中央図書館まで移

動に5分ほどかかる。起伏豊かなキャンパスでもあり、空きコマに自習するには図書館は遠く感じられた。食堂の椅子よりは座り心地よく空調も効いて、ちょっとした空き時間にも使える自習スペースを求める声は潜在的に高かった。A棟の空き教室や滝山テラスなど、他にも学生が自習する場所は散在したが、これらを集約し、利便性を高めたいという施設管理上のニーズもあった。

三つ目は学習支援の側からの要請である。本学の教育・学習支援センターは2000年の開所当初から、全学的なFD推進と共に、学生の学習支援・学習スキル向上に努めてきた。特に学習支援については2009年の学生支援GP（大学教育の改善・向上に向けた文部科学省の補助金事業の一つ）に採択され、一気に拡充・加速された。従来から提供していたレポートの診断や書き方指導に加え、マインドマップ、タイムマネジメントやリーダーシップ開発など、多様なプログラムの提供を始めた。この時のGP調書には、2013年以降GP事業を継承する総合学習支援センターを開設すると記されている。こうしたニーズを背景に、図書館やコンピュータセンターの機能も一部加わり、今の施設となっている。

私 はSPACe開所にあたって、中央教育棟ひいては創価大学の心臓として機能することを願った。心臓は体を巡って疲れた血液を受け入れ、肺の空気を取り入れて活性化した血液を再び体中に送り出すポンプである。勉強に疲れた学生がSPACeで憩い、課題に取り組み受講の準備をし、元気に次の授業に出かけていくあり様は、本学の心臓を連想させた。コロナ前、SPACeには毎日のべ2000人以上が来場していた。学生定員6000人規模の大学として、これは驚異的な数である。コロナ禍中は激減したが、コロナ後の今年、その数を1500人超まで戻ってきている。開所して10年、本学の心臓は今日もしっかり働いている。

セルフ・アクセス・センター (SAC) オープンラウンジ (OL) 開設

OLは、SAC内に設けられた自律語学学習スペースである。昨年度は限定的に設置していたが、今年度春学期は常時開放した。学生は入退出時にOLで行った活動の記録を残す。OLで学生は、一人または複数でそれぞれのニーズに合わせて英語等の外国語学習に取り組む。外国語学習をサポートするためのリソースも多数提供している。また、OL内に英語学習相談室のデスクを設置し、学生の語学学習に関する相談に対応できるようにしている。

OLは、真の自律性を育むために設けられた。そのためOLは個々の学生に適した学習体験を提供することを目的とする。SACの他のプログラムでは、何を行うかあらかじめ決められているが、OLで行われる学習は学生次第である。さらに、OLでの活動は課題のためではなく、学生の自律的な学習とその経験を楽しむために行われる。

SAC運営チームは、春学期のOLの人气に驚いた。OLは、SACプログラムの中で2番目に多く利用があり、1週間に平均189人の学生が利用した。この数値は、SACを利用してもらうために学生に課題等で義務付ける必要はないことを示している。また、日本人学生と留学生がOLで出会い、互いの言語を理解し、楽しくやり取りしたり助け合ったりする事例が数多く見られた。同様に、学生利用者や学生スタッフから寄せられたコメントも励みになった。ある学生利用者は、「OLで過ごす時間は本当に楽しい。

時間があればここに来て、新しい人や友達に会っている」と述べ、OLの学生スタッフは「映画やゲームを通して学生同士が交流したり、友達とおしゃべりしたりするのを見るのがとても楽しかった」「学生が安心して、開放的な空間を創るといふ、OLスタッフの目標が達成できて、うれしく思う」と話してくれた。

今後は、OLが学生のニーズに応え、学生の語学学習を確実にサポートできるよう、より良いOLのあり方を探求したい。OLの本来の目的である、学生が安心して、自律的に外国語を使う空間を提供し今後のモチベーションにつながる環境づくりに貢献していく（アンドリュー・トゥード、森幸恵、ヤップ・ジェ・ヨン）。



プロフェッショナル・ディベロップメント (PD)

2023年7月12日に開催された、ヒューマニスティック・アプローチ (HA) についてのワークショップは、プロセス・ドラマ (上演を目指す演劇とは違い、教育的な効果を意図し教室内の活動等で用いられる演劇のこと) が、WLCのHAをどのように補うことができるかを示すことが目的であった。

WLCのHAは、グローバルな文化を育み、国際的な課題を創造的に問い、理解する中に価値創造があることを中心概念とする。この理念に基づき、WLCは以下を取り入れ推進している：

- 学生の実社会での自発的な英語の活用
- 学生の自主性の促進
- 学生間の協力の奨励
- 教員によるサポートの提供

プロセス・ドラマは、第二言語習得の文脈で、社会正義を探求するためにドラマを使用する教授法である。プロセス・ドラマは、HAに沿った方法であり、学生のスピーチの流暢さと自信を高め、コミュニケーションに必然性を与え、新しい人間関係を生み出す。

教育学や心理学の分野におけるHAには、マズローの欲求階層説やロジャースの学習者中心アプローチがある。どちらも学習者の情緒的な幸福、自律性、経験を優先している。プロセス・ドラマは、個人の成長、即興を通じた探求、学生と教師が共に成長することに焦点を当てることで、このアプローチを補う。

本ワークショップは、WLCのHAを補完する方法として、プロセス・ドラマを用いる意義を参加者と共有した。このワークショップでは、参加者に心理的に安全な環境を

提供しながら、教室内でのChatGPTの利用をテーマに、プロセス・ドラマの手法を体験してもらった。

本ワークショップでは、プロセス・ドラマのような演劇の手法を用いることで、英語の授業においてHAがどのように強化されるかが示された。参加者は、プロセス・ドラマを用いた授業について実践的な知識を得た。このアプロ

ーチは、学習者の過去の経験に価値を与え、動機づけを変化させ、エンパワメントを与えることを学んだ。さらに、英語で社会問題への関与を促す優れた方法であることも学び大変有意義なワークショップとなった（ユークリア・ドネリ）。

第二外国語科目紹介ビデオの作成

WLCでは、2023年度の新入生を対象に第二外国語科目の紹介ビデオを作成した。そのうち、ロシア語とイタリア語のビデオ作成のポイントを紹介する。

ロシア語

新入生は学期開始直前の慌ただしい中で第二外国語を選択していた。そのため、各国語について丁寧に紹介する機会がなく、しかもロシア語は毎年履修者が少ない傾向にあり、この状況をなんとか打開したく思い、科目の紹介ビデオを作り事前に見てもらおうと考えた。作成の際に心がけたのは、学生の関心を引くこと、そしてロシア語が特に難解な言語であるという先入観を取り除くことだった。外国語はそれぞれに難しい点、容易な点があり、決してロシア語だけが難しいわけではない。しかし、ロシア語は独特な文字が多いため、取っつきにくい印象がある。そこで、学生の目を引くものをと思索し、行き着いたのはダンボールで作ったマトリョーシカだった。筆者が後ろに控えて声だけ出し、マトリョーシカが話しているように見せる。そしてマトリョーシカが学生にインタビューするという形式にした。最終的に同僚による協力も得て、質の高い紹介動画が完成した。新入生にこの動画を見てもらい、言語を学び、文化を知ることが平和貢献への第一歩なのだと思ってほしい（江口 満）。

イタリア語

新入生対象のイタリア語紹介ビデオの基本的な狙いは、イタリア語とイタリアの文化に対する、学生の興味やモチベーションを高めることだった。そのために、新入生が既に持っている知識やイメージを瞬時に呼び起こせるような工夫をした。具体的には、短い文言、キーワードの強調、視覚的な刺激、速いテンポなどであった。内容に関しては、イタリアの歴史、芸術、建築、文学、音楽、料理、デザインなどの魅力をアピールした。イタリアで活躍した著名な芸術家、科学者、文学者、世界遺産を紹介した。さらに、イタリア語の特徴やイタリア語の発音は易しいことを説明し、いくつかのフレーズを読むコーナーも設けた。世界最古の総合大学であるボローニャ大学と本学との交換留学協定に言及した後、ボローニャ大学で学んだ2人の先輩のインタビューを含めた。最後に、ボローニャ大学に留学して、現在イタリア語を仕事で使っている3人の卒業生の活躍を紹介した。このように、学生が学んでみようと思うような内容となるよう工夫を施した（マルチェラ・モルガンティ）。

■WLC 教員の紹介 フォレスト・ネルソン講師



アメリカ出身のネルソン講師は、南ミシシッピ大学でTESOL（英語教授法）の修士号を取得した。1989年に来日し、過去27年間にわたり様々な企業や大学で英語を教えてきた。現在、ネルソン講師は共通科目英語科目と法学部の専門科目を教えている。

ネルソン講師の関心は、コンピューター支援言語学習

（CALL）と教師評価・採点ソフトウェアの開発にある。また、言語活動において一貫したフィードバックを提供する教育補助としてのAIの使用を現在調査している。

ネルソン講師はWLCのコーディネーターでもあり、上級レベルの英語科目の運営責任者である。他のコーディネーターと協力してヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）を英語科目に組み込むことにも取り組んでいる。ネルソン講師はこれらの役割を通しWLCの発展に貢献している。

GCPディレクター教授 佐々木 諭

GCP14期生30名を選抜合格

グローバル・シティズンシップ・プログラム（以下GCP）は、創価大学の学部横断型選抜プログラムであり、入学時に、本学の世界市民の理念に共感する学生約30名が選抜されます。GCPは2年間の正課集中プログラムであり、高度な英語実践力、論理的思考力、課題解決力、データサイエンス力を育むことを目指しています。

今年度は、書類審査の一次審査、英語ライティング、小論文、面接の二次審査を経て、30名がGCP14期生として選抜されました。GCP生は、所属する学部の授業を受けた後、放課後にGCP授業に参加し、学部授業の課題と合わせGCPの高いレベルの課題にも取り組みます。同期同士の励



ましだけでなく、先輩からのサポートも受け、14期生30名が春学期のGCP科目を無事に終え、秋学期からは更に高い目標に向かい日々学びに挑戦をしています。

第16回GCP総会を開催

GCPは、年に2回GCP総会を開催しています。GCP総会は、在學生と卒業生がGCPでの学びの成果や卒業後のキャリアについて報告し、それぞれの目標に向けて挑戦の決意を深める機会となっています。

5月3日（水）には、16回目となるGCP総会が対面とオンラインのハイフレックスで開催されました。総会では、在學生を代表して1年生2名、4年生1名が活動報告を行いました。1年生の田中美月さん（教育学部）は、GCPで英語力と発信力を鍛え、日本の幼児教育を発展させるために、海外の幼児教育の研究が進んでいる国に留学する決意を語りました。保坂優子さん（理工学部）は、10年前に本学のオープンキャンパスに参加した際にGCPを知り、GCPに入るために英語学習へのモチベーションがさらに強くなったと語り、今後は、データサイエンスを用いて、保健健康医療や教育分野の課題の解決に貢献したいと抱負を述べました。

4年生を代表し、庵下さやかさん（経済学部）がタイ・タマサート大学の交換留学と就職活動について報告しました。厳しい就職選考に挑む中、「労苦と使命の中でのみ 人生の価値（たから）は生まれる」との創立者の言葉に自身を鼓舞し、外資系ITコンサル企業に内定をいただいたことを報告しました。

卒業までの学生生活では、留学や就職活動の経験を生かして大学に貢献し、さらに成長していく決意を述べました。

その後、卒業生を代表して卒業生2名が活動報告を行いました。GCP 8期生の布川裕一さん（経済学部卒）は、東京大学公共政策大学院に進学し、レベルの高い英語でのディスカッションやグループ研究など苦戦する中で、「何のための学びか」との原点に立ち返り、卒業時には成績優秀賞を受賞されました。大学院卒業後は、国家公務員として社会で困窮する人を支えていく決意を述べました。

GCP5期生の尾張智華子さん（法学部卒）は、中国への交換留学の経験をもとに、日中友好と世界中の人に笑顔を届けることを目指し、社会インフラを支える損害保険会社に入社し、今年度より中国現地法人に配属となりました。「現地のスタッフや地元の方々との交流を大切に、創立者が築いてくださった日中友好の金の橋をさらに磨いていきたい。創大卒業生としての誇りと使命を持ち、後輩の道を切り開いていきたい」と決意を述べました。

最後に、鈴木学長は、「いかなる職業や立場であれ、社会の役に立っていかうとの真心と誇りをも持って、不屈の負けじ魂で勝ち進んでいただきたい」とエールを送りました。





2023年度春学期についてのご報告

2023年春学期のSPACeのサービスは、基本的に対面で（一部オンラインを併用）行いました。
以下、各部門の春学期の利用者統計を報告します。

ヘルプデスク

■表1 2023年春学期 HELP DESK 学習相談利用者（人）

	4月	5月	6月	7月	合計	%	前年比
予約	8	8	11	9	36	20.70%	0.69
飛び入り	74	31	22	11	138	79.30%	0.92
合計	82	39	33	20	174	100.00%	0.86

■表2 2023年春学期 HELP DESK 学習セミナー参加者（人）

No.	実施日	セミナー名	参加者
1	5月24日	ICT	9
2	6月14日	留学	24
3	6月21日	試験対策GPA I（経済・経営・法）	12
4	6月28日	試験対策GPA II（文・理工・教育）	28
5	7月 5日	タイムマネジメント	16
		合計	89

日本語ライティングセンター

■表3 2023年春学期 JWC 利用者（人）

	4月	5月	6月	7月	合計	%	前年比
チュータリング（実施数）	0	107	56	81	244	54.22%	1.02
レポート診断	0	83	10	113	206	45.78%	0.68
合計	0	190	66	194	450	100.00%	0.83

■表4 2023年春学期 JWC 学習セミナー参加者（人）

No.	実施日	セミナー名	主催	参加者
1	5月12日	文献検索セミナー【導入編】	SPACeレファレンス・図書館・JWC連携	12
2	5月19日	レポートお助け隊①	JWC	17
3	5月22日	レポートお助け隊②	JWC	26
4	6月 7日	文献検索セミナー【実践編】	SPACeレファレンス・図書館・JWC連携	5
5	6月16日	三角ロジック	JWC	12
6	6月26日	レポートお助け隊①	JWC	6
7	6月30日	レポートお助け隊②	JWC	5
8	7月31日	絵本ブッククラブ	図書館・JWC連携	11
		合計		94

調べごと相談

■SPACe調べごと相談（レファレンス）利用件数／2023年度春学期

	4月	5月	6月	7月	春学期	%
学術文章作法	0	7	19	11	37	61%
演習（卒論）	2	0	1	0	3	5%
その他	5	4	7	5	21	34%
合計	7	11	27	16	61（56）	

（ ）は開設以来の春学期の平均

※調べごと相談は、
①対面
②Zoom
③メール
を併用して行いました。

CETLは学士課程教育機構の教育支援組織として、FD・SD委員会や教務課と連携して様々なFD・SDイベントを企画・運営しています。以下は、2023年度上半期の活動報告です。

2023年度 FD・SDセミナー（学士課程教育機構主催）

■ 第1回学士課程教育機構FD・SDセミナー

6月23日（金）、桐蔭横浜大学の森朋子 学長に講師をご担当いただき、本年度第1回学士課程教育機構FD・SDセミナーを開催いたしました。「偏差値50以下からの逆襲：桐蔭横浜大学の取り組み」と題して、ボリュームゾーン（分厚い中間層）教育の必要性、OECDが定義する社会情動的スキルを伸ばす取り組みやプログラムの構築、学生の成長を中心とした教職協働の在り方等についてお話いただきました。「偏差値の高いトップ層だけを一生懸命支援するのではなく、分厚い中間層であるボリュームゾーンを支えていくことが今後の教育にとって必要である」と講義いただき、活発な質疑応答が行われました。当日は65名（本学教職員・学生）の方にご参加いただき、終了後のアンケートでは、「大変に勉強になりました。教職協働の姿の1つの具体例を見せていただき、感謝です。」等の声が寄せられました。



■ 第2回学士課程教育機構FD・SDセミナー

9月4日（月）、本学教職大学院の山崎めぐみ 准教授に講師をご担当いただき、本年度第2回学士課程教育機構FD・SDセミナーを開催いたしました。「学部・学生に合ったアドバイジングを考える」と題して、学生の学習機会と成長を結び付けるアドバイジングの重要性やアカデミック・アドバイジングのアプローチの種類、自身の傾向性や学部等で必要なアプローチの見極め、本人の意思決定を支えるアドバイジングの姿勢等について、グループディスカッションを交えながら、お話いただきました。当日は28名（本学教職員）の方にご参加いただき、終了後のアンケートでは、「他学部の先生方のお話も大変勉強になりました。実際にグループワークをすることで、自身の傾向も明確になった部分があったと感じました。」等の声が寄せられました。



新任教員研修

■ 新任教員（テニュアトラック教員）向け研修プログラムの概要

FD・SD委員会は今年度から、テニュアトラックで採用された新任教員に対して3年間で40時間相当の研修受講を義務付けることにしました。この方針のもと、CETLでは国立教育政策研究所の基準枠組を参照しつつ、愛媛大学・芝浦工業大学・帝京大学などの取り組みを参考に、研修プログラムを作成しました。本学が取り組む相互評価文化の醸成を目指したプログラムの修了がテニュア審査の要件となります。プログラムは次の5領域をカバーする内容となります（下の5項目参照）。これら5領域にそれぞれ研修の成果目標を設定し、本学の教員として期待される職能開発を目指します。

1. 本学の教育・大学運営の方針理解
2. 授業設計・構想（多様な評価方法を含む）に関する知識・技能
3. 授業実践・学生指導（学生への適切なフォードバックを含む）に関する知識・技能

クを含む）に関する知識・技能

4. カリキュラム開発・評価に関する知識・技能
5. 大学教員としての専門性の開発・同僚性の向上

【春学期実施分】

● 第1回新任教員スタートアップセミナー

4月22日（土）、本年度第1回新任教員スタートアップセミナーが開催され、昨年9月以降に採用された新任教員17名が参加しました。田中亮平 副学長／FD・SD委員長による「創立50周年を迎えて—創価大学グランドデザイン2021-2030—」の講演では本学のグランドデザインを中心とした様々な取り組みと展望を確認し、西浦昭雄 副学長／教務部長による「本学における授業運営の諸課題—多様な学力レベルの学生対応を中心に—」の講演では近年の大学入学者の変化や、その特徴、また授業を行う上で

の様々な注意点や課題等について学びました。

午後は関田一彦 副学長／CETL センター長が「創価大学における教育・学習支援サービス」について説明と関連した質疑応答を行いました。最後にセミナーでの学びについて参加者同士で振り返りを行い、参加者からは、「創価大学が教員の育成自体に力を入れていることが良くわかりました。」などの声が寄せられました。

●第2回新任教員スタートアップセミナー

7月22日（土）、本年度第2回新任教員スタートアップセミナーが開催され、昨年9月以降に採用された新任教員18名が参加しました。田中亮平 副学長による開会挨拶の後、新任教員を代表して、津田真秀 教育学部児童教育学科講師による「教科の指導法からの円滑な接続を目指した少人数受講者を対象とした授業設計」、今井淳子 看護学部看護学科講師による「感染防止の技術の講義・演習を通して」の2件の教育実践報告がありました。参加者からは、「授業改善の視点を違った立場の教員の事例をもとに知ることができた点が非常に有意義でした」などの声が寄せられました。



●授業設計研修Ⅰ／CETL 勉強会

5月13日、CETL の勉強会を兼ねた新任教員向け研修として、関田一彦 副学長／CETL センター長による「授業設計研修Ⅰ」を開催し、教員16名が参加しました。シラバスの役割と機能、授業設計における目的や目標設定、その目標達成と学生の学習意欲を想定した授業展開の重要性などについて学び合いました。また、グループディスカッションを通じて、参加者同士の意見交換も活発に行われました。アンケートには、「シラバスを作成する際の注意点や、到達点を見据えて授業を進めていくことの重要性を再認識しました」等の声が寄せられました。

●授業設計研修Ⅱ／CETL 勉強会

7月22日、関田一彦 副学長／CETL センター長による「授業設計研修Ⅱ」を開催し、教員19名が参加しました。ディプロマ・ポリシー及びラーニング・アウトカムズからの視点や授業設計の背景にある考え方を理解し、アセスメントを組み込んだコース設計や主体的な学習を促すための学習評価などについて学び合い、ディスカッションを通じて参加者同士の意見交換も活発に行われました。アンケートには、「大学運営やディプロマ・ポリシーの視点から自分の担当する講義を見る良い機会になりました」等の声が寄せられました。



その他のCETL勉強会／研修会

■簡易版ティーチング・ポートフォリオ メンター研修

7月27日、関田一彦 副学長／CETL センター長による「簡易版ティーチング・ポートフォリオ メンター研修」を開催し、CETLセンター員である教員8名が参加しました。

本学では、全学及び学部 FD 活動の一環として、簡易版ティーチング・ポートフォリオ（以下、TP）の全学的な導入を2021年度から進めています。この簡易版 TP 作成に際し、メンター役の教員との面談が重要になります。本研修は、メンター役に期待されることや TP 作成の留意点などについて学び合い、今秋からの TP 作成にメンターとして活動するための研修となりました。



新たな産学連携科目の開設など本年度の取り組みについて

■ データサイエンス教育推進センター長 浅井 学

データサイエンス教育推進センターは、学生たちが「世界市民として、各学部で学ぶ専門分野において、数理・データサイエンス・AIのスキルを活用した問題解決能力」を飛躍的に高めていけるような教育体制を整えていけるように2021年5月に設置されました。最近の取り組みについて、3点紹介させていただきます。

1点目は、創価高校および関西創価高校において、高大接続の授業として「データサイエンス入門」を昨年度より開講したことです。この科目は全学生が1年次に履修する必修科目であり、受講者が大学生と同じ基準で要件を満たせば、本学に進学後に単位として認定されます。東西の創価高校3年生の希望者を対象に、放課後の時間を使って開講したところ、いずれも100名近い生徒が授業に取り組み、188名が単位取得に必要な要件を満たしました。授業を担当された服部先生またSAの皆様の尽力に御礼申し上げます。特に高校と大学では、授業の時間帯が異なるだけでなく、試験期間や春休みも異なります。多くの労力を割いて、姉妹校のデータサイエンス教育の向上に尽力して下さいました。この取り組みについては、本センターと数理・データサイエンス教育強化拠点コンソーシアムの共催で2023年1月27日（金）に開催したワークショップ「学生とつくるデータサイエンス教育～アクティブラーニングのための教職学・産学連携～」の講演「アクティブラーニングのための教職学連携」でも紹介しています。

2点目は、文部科学省の数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（応用基礎レベル）に関するワークショップでの登壇です。この認定制度は、数理・データサイエンス・AIを活用して課題を解決するための実践的な能力を育成することを目的として、数理・データサイエンス・AIに関する知識及び技術について体系的な教育を行うものを文部科学大臣が認定及び選定して奨励する制度です。本学は昨年度の認定を受けて、また数理・データサイエンス教育強化拠点コンソーシアムの協力校として、2023年6月26日（月）

に開催されたワークショップ「認定制度（応用基礎レベル）の申請に向けて ～認定を受けた大学の経験談と個別相談会～」において、講演「応用基礎レベル認定を受けた5大学における取り組み紹介」を敬愛大学・工学院大学・電気通信大学・横浜市立大学の代表とともに担当し、講演だけでなく個別相談会にも臨みました。ワークショップには応募を検討している大学関係者など235名が参加し、本学も含めて5大学に多くの質問が寄せられました。また後日、個別に本センターに応募相談の依頼がありました。

3点目は、産学連携科目としての共通科目「データサイエンス演習」に関するものです。この科目は、データサイエンスを学ぶ学生が、企業の目線で実践的な演習に取り組むことを目的として設置されました。本学では、2021年度より日本IBM株式会社との共催科目として開講してきています。これに加えて昨年度の秋学期には、アスクル株式会社との共催により開講することができましたが、本年度は、アクセンチュア株式会社の後援のもと秋学期に開講します。アクセンチュア株式会社の後援のもと、実社会での問題を解決するために、課題や問題点を見つけ、課題に応じた適切な分析方法を選択し、データ分析を行って実践経験を身に付けることを目的としています。この目的のため授業は、① Python言語を使った機械学習の基礎（教師あり、教師なし）の修得（授業8回分）、② 最先端の自然言語処理と画像データ処理の学習（授業2回分）、③ 実データを用いた協働学習（PBL）（授業4回分+成果報告）という3つの内容から構成されています。アクセンチュア株式会社には②③で協力をお願いしています。学生たちが大きく成長する授業となるように、取り組んでいきます。

本センターは、今後も学内外と広く連携をとりながら、創価大学のデータサイエンス教育のさらなる充実化に向けて取り組んでいきます。

学士課程教育機構
新任教職員紹介

WLC 助教……ン ジーリアン



創価大学

創価大学学士課程教育機構ニュースレター [SEED] 第26号
発行日 2023年10月17日
発行者 創価大学学士課程教育機構
〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236
<https://www.soka.ac.jp/seed/>

